

坂口紀良—「光を感じる空間」に“生きる歓び”

中山真一



29. 《乗馬の見えるバラの窓辺》8F

この作品(乗馬の見えるバラの窓辺)の作者である坂口紀良は、1948年(昭23)愛知県豊橋市で生まれた。中学時代から美術部に所属するものの、ホルンの演奏も好み、将来は画家をめざすか音楽の道へ進もうかと迷う。両親もともに広く親戚を見わたしてさえ、画家も音楽家もいなかった。けっきょく二浪して東京藝術大学油画科に入学。同じく愛知県三河の出身・中根寛(現・岡崎市生)の教室に学んだ。卒業制作は安宅賞を受賞するとともに文部省(現・文部科学省)の買上げとなる。そのころの制作は、暗いトーンによるオーソドックスで写実的なもの。中根の推薦で国会議員の肖像画を描き、みごとにできばえとなっている。デッサン力をきたえながら、さらに他日を期すところとなった。

そして、大学院時代に結婚し、修了後3年目(77年)にして二人の女兒をふくめ家族4人でパリへとわたる。その2年ほどのあいだ、オルセーなど美術館によく通った。「いい絵は動いている」「息をしているよね」と、しばしば夫人につづやっていたという。学生時代から好んだルノワールに、いっそう感化されていく。さかんに研究的な制作をつづけていくものの、もうこういう絵の時代ではないのではないかとも思われるようになった。大正時代の中村彝でさえ、自身のルノワールへの傾倒をけて時代おくれのつもりはないと弁明せねばならなかったほどである。坂口は、ほどなくしてマティスをじっくり見るようになり、熱心に研究していった。なんとというきれいな色だろう。自分もこんな絵が描きたい。南仏ニースにあるマティス美術館や、マティスが室内装飾画を手がけた教会を感激して見てまわった。

画家にとって色彩感覚はしばしば天性のものとされる。だが坂口からすると、「色というものは研究するもの」、色のつかい方という技術の問題だと気がついた。マティスやファン・ゴッホでさえそうだったという。そこでまた、色彩の問題はフォルム(かたち)の問題と不可分とも知る。パルルール(あるべき色彩の階調)をふくめそのバランスのなかで自分自身の空間が生みだされていく、すなわち造形の力だと理解するようになった。

「(注・自分の絵は)明るすぎるといわれるのですが、自然はもっと明るい。絵画は限られた平面ですから、もちろん彩度も明度も落ちるんですけど、それでも自然の輝きに近づけたいのです。絵の空間に明るさを感じさせるのは、現象的な光と影ではなくて、色とかたちによって光を感じる空間を生み出せるかどうかなんです」「何を塗っても色がうまいかないときは、かたちが悪いのです。かたちを直せば空間が決まり、色も自然に納まってくれる。空間をつくるのは色ではなくかたちなんです」そこで僕にとって大事なものは線なんです。線で空間を作る」「好きな画家はゴッホ。あれだけ色彩を理論的に描いた人はいない、マティスはもちろんだけど」「そして(注・ゴッホは)何を描いてもゴッホなんです。僕自身も何を描いても自分になるということを求めています。そのために自分の文法をつった。その文法をさらにもっと広げて、風景も花も人物も自由に描いていこうと思っているんです」。(※1)

帰国後は、阿佐ヶ谷絵画専門学校(東京)で教職につき、同僚となった橋本博英や中村清治らの影響を受け、みずからの絵画論を補強していく(のちには立軌会に所属し、笠井誠一にも)。また坂口は、ほとんどが人気作家の道を歩んでいくことになる。造形力が、その明い色彩の画面として市場でも歓迎されるところとなり、30代にして画廊やデパートでの個展はかなりの売れ行きであった。

それは画家にとって、ある意味では理想的なことである。教職などにあまり多くの

時間をとられることなく、作品を売って生計がなりたつなら、それにこしたことはない。アリエで好きなモーターツットを流しながら、ほとんど制作三昧の日々となり、創作はきつて快調にすんだ(ブックナーの場合はなにもせず目をとじて聴いていた。CD所蔵1000枚以上、レコードは約200枚)。友人はだしのホルンも、目黒区民オーケストラの団員になって演奏会には約10回加わっている。

そんな日々のなか、1992年(平4)44歳にして多摩湖畔(東京都東和市)ちかくに82坪の土地を購入し、アトリエをたてた。この30年ローンを返済するのがたいへんだと当時、坂口から聞いたことがある。毎年の税金の支払いも多額におよんだ。40代にして単純に“多産な成熟期”とはいえないようなローン返済の年月となっていく。戦後生まれできわめてまれな絵筆一本で生計をたてる画家といえ、聞こえがよいものの、内実はちがった。美術不況が深まっていくなか、画廊もさかんに坂口作品を買いとり、販売していく。ボソボソと訥弁で話す朴訥な人柄ゆえか、この種の苦惱を本人からはっきりと伺うことはなかった。また、それまで画壇では無所属をとおしていたものの、98年(平10)立軌会に所属して、さらなる研鑽をつんでいく。

しかしながら、画面からそんなきびしい身辺状況がうかがわれることなどは、いっさいなかった。どこまでも「生きる歓び」がつつわってくる。人気のガラス絵などもふくめ、創作はますます快調にすすんでいった。ヨーロッパも南仏やヴェニス、ギリシャから、坂口にとって本来は絵になりにくい陽光やらかなイギリス（テムズ河の上流のほう）まで取材にまわる。宿泊するホテルは、ときに予約もせず、駅に到着すると窓辺からの景色がよさそうなホテルを見つけてはフロントへと飛びこんだ。椅子など調度品にもこだわる。気に入ると何度度も同じ場所に通った。どこの風景もすべて坂口調の立派な作品に。南仏など地中海世界やロンドン周辺など、すべてはそれぞれ輝く色彩や抑えた色調で坂口の色感がさえわたっていく。

そのころ、橋本博典から私信で、「小生の後輩に、貴兄以上の画家は見当たらないとさ思います。健康で、素直で、至純の世界を描いてひとを感動させるのは容易なことではありません。完全に脱帽です」とあった。ちなみに橋本は、後日の手紙で今の多くの若い洋画家について、「造形的に趣味的です。というのは空間の中に、ワケの解らない部分が多過ぎるのです。それでは、絵画が思想表現になりません」と述べ、「その点、貴作は、すべて明快です。しかも、輝いています。画面の隅々まで、ものの関係を明確に置いて、しかも、実と虚のかたちが調和的に噛み合い、光あふれる空間を現出するのは、容易なことではありません」と結んでいる。

創作が順調に展開されていくなか、2008年(平20)私でもでの個展を機に、地元・豊橋市美術館やお隣の豊川市桜ヶ丘ミュージアムから注目をうけることとなった。それまで、売れっ子画家ということでアカデミズム方面からは坂口作品が軽んじて見られるようなところがあったかもしれない。公立美術館という、しばしば前衛志向でさえあるアカデミズムのワクからは外れた画家とみなされがちであった。しかしたまたま、そうした偏見がなく慧眼をそなえた館長や学芸員たちのお蔭もあって、各2点ずつ収蔵されることとなったのである。ちなみに橋本博英(岐阜市出身)や中村清治(横浜市出身)はそれぞれ出身県の公立美術館にまだ収蔵がない。坂口の場合、戦後生まれの洋画家で、しかも地元在住ではなく、まったく異例の「飛び級」で作品収蔵されたのである。

坂口が早すぎる晩期をむかえたころ、子育てはもとよりアトリエのローンも終盤をむかえた。生活上の辛苦をいっさい見せぬ制作は、アマルフィ(南イタリア)の海辺を描くなどで、いよいよ頂点に達したかのようである。色彩はますます純度を高め豊潤に。色を自由につかえ、どんなに光彩つく原色が多用されても確たるリアリティがあった。坂口のきわめた造形に、まれなる力量がこもったのである。それまでの日本洋画に類例のない爽やかで明瞭な作風により、笠井、橋本、中村をついで日本洋画を新たな段階にすすめた。日本人にはなかなか消化しにくかったマティスを無理なく自身のものとしていったのである。

※坂口紀良夫人・坂口とし子様、立軌会同人・遊馬賢一先生にお話をお伺いするとともに資料のご提供をいただきました。また、橋本博英夫人・橋本整子様には私信掲載のご了承を頂戴いたしました。

主な参考文献：『一枚の繪』（一枚の繪株式会社、2010年6月号、No466）。坂口のカギカッコ発言部分（※1）は同誌からの引用です。

(『火涼』No.90、火涼会、2025年11月)

坂口紀良

Noriyoshi SAKAGUCHI

—「光を感じる空間」に“生きる歓び”—



1. 《ボン・ヌフ》 100F



2. 《アマルフィ海岸を見渡す天空のテラス》100F



3. 《噴水に見える秋のセントラルパーク》100F



4. 《ホルンのあるコートダジュールのテラス》 100F

坂口紀良 略歴 1948/愛知県豊橋市生。72/東京藝術大学(中根寛教室)卒、卒業制作文部省
買い上げ(安宅賞)。74/同大学院修了。74-95/朝の会展。77-79/滯仏。83/油絵大賞展(東京セン
トラル美術館)招出作品。90/ニューアーティストスウェーブ展。92/多摩湖畔にアトリエを構える。94/
97/年の会展(銀座和光)招出作品。96-2010/光の会展(銀座和光)。98-08・15/名古屋画廊開催。
04-12/桃花の会(日本橋高島屋)。09立軌会同人。11樓の会展(日本橋高島屋)。2019/逝去(71歳)。

発行者 中山真一
発行日 2026年8月17日
制作 名古屋アートプロジェクト
デザイン 與語秀樹
撮影 福岡 栄

名古屋画廊

〒460-0008 名古屋市中区栄1-12-10
Tel.052-211-1982 Fax.052-211-1923
E-mail: nagoya@nagoyagallery.co.jp
URL: <https://www.nagoyagallery.co.jp>



名古屋画廊

NAGOYA GALLERY



5.《アマルフィ海岸を望むホテルのテラスから》100F



6.《ベレー帽と窓辺のポーズ》50F



7.《ベネチア》50F



8.《森の乗馬・セントラルパーク》50F



9.《ユーゲ海のオレンジのテラス》50P



10.《音楽の部屋》50F



11.《コートダジュールのテラス》30F



12.《バラのある音楽の部屋》30F



13.《ホルンのあるコートダジュールの窓辺》30F



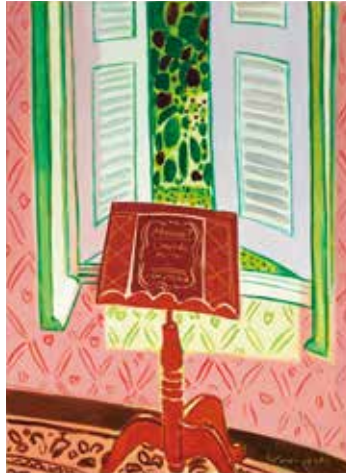
14.《ボジターノの街を臨むサンピエトロのテラス》30F



15.《バイオリンのある音楽の部屋》30P



16.《アマルフィ海岸を見渡す天空のテラス》30F



17.《音楽の窓辺》20P



20.《乗馬の見えるバラの窓辺》15F



18.《アネモネのあるコートダジュールの窓辺》20F



21.《マナーハウスの窓辺》20P



22.《ユーゲ海のカフェテラス》20P



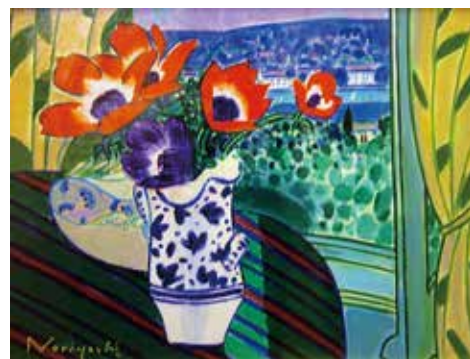
23.《カーネーションのあるコートダジュールの窓辺》20P



24.《アーリントンローの街並》12F



25.《アネモネのあるコートダジュールの窓辺》8P



26.《アネモネのあるコートダジュールの窓辺》6F



27.《ストックのあるコートダジュールの窓辺》6F



28.《乗馬の見えるバラの窓辺》10F